

自画像のようなもの

Self-Portrait-Like Works

会期 2021年10月19日 | 火 | - 12月26日 | 日 |

会場 近現代美術室 B



誰もが簡単に自分の姿を撮影し、加工し、共有することができる今。「わたし」を描く・見せることには、どんな可能性が広がっているのでしょうか。

本展では、当館所蔵品のなかから、自画像の形式をとる、あるいは「自画像のようなもの」といえる作品を紹介します。

西洋ではルネサンス以後、日本では明治ごろから自画像という形式が登場します。近代に生まれた「個性」という概念は美術の世界に強い影響をもたらし、近代以降の美術は、たとえ作家自身が描かれていなくても、自画像のヴァリエーションだといえるほどです。

一方で、自画像は、作家の外見・内面だけでなく、彼らの生きる時代や社会を映し出します。自分らしさが他者との関係のなかで浮かび上がるように、自画像もまた社会や時代背景と無関係には成立しません。ここに並ぶ作品は、有名人になること、イメージとジェンダー、公と私など様々なテーマをはらんでいます。「わたしはなぜここにいいのか」という哲学的な思索へと誘う作品もあります。

本展で紹介する作品は、自分を描いたという意味で広義の自画像といえます。しかし、そこに描き込まれている主題は多様です。「自画像のようなもの」というあいまいな名前と呼ぶことで、その多様な表現に目を凝らします。

[学芸員 忠 あゆみ]



福岡市美術館
FUKUOKA
ART
MUSEUM

〒810-0051
福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051 (代表)
FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

図版：上田薫《スプーンの自画像 A》1990 年

覧 忠治 KAKEHI Chuji (1908-2004)

自画像 16

Self-portrait 16

1930

インク・紙

ink on paper

41.9×33.9

西本コレクション

16-D-17

4. 社会の中の芸術家

郭徳俊の「大統領シリーズ」は、『TIME』誌の表紙を飾る歴代のアメリカ大統領の顔写真を半分に切り、鏡を使って作者自身の顔の下半分と継ぎ合わせた作品です。「世界の顔」である大統領と対照的な郭の何気ない表情は、権力や国家に回収されえない個人の確かな実存を訴えています。

このように、自分自身を描くことは、背後にある時代や、社会情勢、その中で生きる作家のありようを映し出すことでもあります。ケーテ・コルヴィッツの自画像は、理想化された女性像を求める「世間の目」に対抗する画家の立場、彼女が生きた両大戦間の時代の厳しさを映し出します。殿敷侃や尾花成春の場合、自分をシンボリックに描くことや描写の手法そのものによって、彼らが生きた時代を象徴的に伝えています。美術をめぐる価値観は時代とともに成熟していき、美術家たちは表現を通して社会と関わるようになっていきました。これらの自画像は、個人を立脚点に、芸術が社会とどう向き合い、関わるができるかを示しています。

ケーテ・コルヴィッツ Käthe KOLLWITZ (1867-1945)

前向きの自画像

Frontal Self-portrait

1923

木版・紙

woodcut on paper

15.0×15.5

西本コレクション

16-E-332

額に手を置く自画像

Self-portrait, Hand at the Forehead

1910 (1914/15年再版)

エッチング、ドライポイント・紙

etching and drypoint on paper

15.4×13.9

西本コレクション

16-E-1452

郭 徳俊 KWAK Duck-Jun (1937-)

フォードと郭 (セピア)

Ford and Kwak (Sepia)

1975

フォトリトグラフ・紙

photolithograph on paper

42.0×33.6

1985年個人寄贈

3-E-338

オバマと郭

Obama and Kwak

2009

シルクスクリーン・紙

silkscreen on paper

51.7×36.7

2011年個人寄贈

3-E-780

殿敷 侃 TONOSHIKI Tadashi (1942-1992)

自画像のある風景

Landscape with a Self-portrait

1969

アクリル・画布

acrylic on canvas

51.2×39.0

2019年天野紋子氏寄贈

1-A-684

尾花 成春 OBANA Shigeharu (1926-2016)

作品

Work

1958頃

アスファルト、紙、革、金属・板

asphalt paper, leather and metal on board

72.9×43.0

1993年個人寄贈

1-A-402

作品リスト
※記載は、題名（日英）、制作年、技法・材質（日英）、画面寸法（縦×横cm）、寄贈情報、当館分類番号である。

1. 「わたし」の記念碑

自画像を描く文化は、日本では明治中期以降に定着しました。東京美術学校では、西洋画科発足当時、教授の黒田清輝の発案で授業の一環として自画像を描くことが課されたと考えられており、1902（明治35）年以降現在に至るまでその伝統は続いています。

さかに自画像が描かれるようになった要因は、画家自身がモデルになるのがもっとも手軽だから、人物画を描く技術を身に着けるため、など諸説ありますが、この頃「個性」や「自己の探求」といったテーマが芸術において重要な価値を持つようになったことも強く影響しているでしょう。

やがて作家たちは、自画像を通して自らの決意や立場を表明するようになりました。自画像は作家そのものだ、という見方は、現在も強い影響力があるのではないのでしょうか。ここでは近代以降の作家たちによる「自画像のようなもの」をご紹介します。

中村 彝 NAKAMURA Tsune（1887-1924）

顔

<i>Face</i>
1910
油彩・画布（板に貼付）
oil on canvas（mounted on board）
直径26.0
太田コレクション
7-A-32

村山 槐多 MURAYAMA Kaita（1896-1919）

自画像

<i>Self-portrait</i>
1915
木炭・紙
charcoal on paper
36.7×19.4
2-D-5

藤森 静雄 FUJIMORI Shizuo（1891-1943）

題不詳（自画像）

<i>Title Unknown</i>
1915
油彩・画布
oil on canvas
60.5×45.8
2003年藤森素彦氏寄贈
1-A-500

平野 遼 HIRANO Ryo（1927-1992）

自像

<i>Self-portrait</i>
1970
油彩・画布
oil on canvas
53.1×45.7
西本コレクション
16-A-14

2. あるがままの姿

肖像画を数多く手がける画家・木下晋は、「自画像を描く難しさは、あるがままの姿にどれだけ立ち向かうことができるかである」と述べました。自分が認めたくない姿を直視することには苦しみがつきものです。自画像制作に取り組む作家も同じで、程度の差はあれど、誰もが自意識と闘いながら制作を行っているのではないのでしょうか。

ここに並ぶのは、さまざまな手法で「あるがままの姿」が描かれた自画像です。物理現象を利用して、写実描写によって、あるいはまったく別の方法で、画面のなかに生々しく彼らの痕跡が残っています。「あるがまま」をめぐる試行錯誤への答えは、写実的に描くことだけではありません。ここには、空間や時間がゆがんでいるように感じられる作品も含まれています。自分の意識に焦点を当てた、作者本人にしか表せないヴィジョンも、あるがままの姿といえるでしょう。

藤 浩志 FUJI Hiroshi（1960-）

コップの中の自画像

<i>Self-portrait in the Glass</i>
1987
鉛筆、色鉛筆・紙
pencil and color pencil on paper
37.7×28.1
2005年作家寄贈
1-D-430

ホルスト・ヤンセン Horst JANSSEN（1920-1995）

自画像、1969

<i>Self-portrait, 1969</i>
1969
ドライポイント・紙
drypoint on paper
29.6×20.6
西本コレクション
16-E-721

ベルリン人としての自画像

<i>Self-portrait as Berliner</i>
1971
エッチング、アクアチント・紙
etching and aquatint on paper
26.9×18.7
西本コレクション
16-E-720

藤野 一友 FUJINO Kazutomo（1928-1980）

自画像

<i>Self-portrait</i>
1950頃
鉛筆・紙
pencil on paper
31.3×21.8
2-D-29

木下 晋 KINOSHITA Susumu（1947-）

自画像

<i>Self-portrait</i>
2006
鉛筆・紙（パネルに貼付）
pencil on paper（mounted on board）
125.8×105.1
西本コレクション
16-D-41

フランシス・ベーコン Francis BACON（1909-1992）

自画像の習作

<i>Study for Self-portrait</i>
1973
リトグラフ・紙
lithograph on paper
85.3×63.5
3-E-2

上田 薫 UEDA Kaoru（1928-）

スプーンの自画像A

<i>Self-portrait on Spoon A</i>
1990
油彩、アクリル・画布
oil and acrylic on canvas
141.0×31.7
2-A-157

オチ オサム OCHI Osamu（1936-2015）

脳波による自画像四面体

<i>Self-portrait in Four with Brain Waves</i>
1987
オフセット・紙（板貼）
offset on paper（mounted on board）
170.2×274.4
1991年越智順子氏寄贈
1-E-622

3. 演じられた「芸術家像」

芸術家が、彼らの強烈なキャラクターによって認知されているケースは珍しくありません。メディアに登場する際に、ある種の作家たちは個性的な身なりや振る舞いを自らに課し、特定の人物像を演じることによって、作品の世界を示そうとしてきました。

自画像においても同様です。上記のような作家たちは、自分の見せたい作家像を画面の中で演じています。例えば、横尾忠則の最初期の作品《TADANORI YOKOO》に描かれた美しい人物像は、全く本人に似ていません。横尾は、似ていない人物像を自画像とし、作中で死なせることによって、新たな自分の誕生を宣言します。まさに演劇的な手法といえるでしょう。

こうした自画像は、作家の「あるがままの姿」とは言えませんが、作家がどのように表現活動と向き合い、鑑賞者と関係を結ぼうとしているのかを示しています。

横尾 忠則 YOKOO Tadanori（1936-）

TADANORI YOKOO

<i>Tadanori Yokoo</i>
1965
シルクスクリーン・紙
silkscreen on paper
98.8×71.5
2-E-658

レオナルド・フジタ（藤田 嗣治）Leonard FOUJITA（FUJITA Tsuguharu）（1886-1968）
--

自画像

<i>Self-portrait</i>
1928
鉛筆・紙
pencil on paper
29.0×20.6
2011年大森政氏寄贈
3-D-34

草間 彌生 KUSAMA Yayoi（1929-）

自画像

<i>Self-portrait</i>
1986
シルクスクリーン・紙
silkscreen on paper
53.0×45.0
2-E-718